

あうる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話17

江戸期から開拓時代まで
北に暮らす人々の必需品を
運んで来た北前船。
それはまさに
北海道民の命綱であつた。

北前船は道南エリアだけの物資供給から
全道開拓者への物資供給へと様変わりし
莫大な利益をあげた

日本海を西回りで

江戸時代から明治初期の北海道は物の無
い時代だつた。

米ができない。だから稲も無い。稲が無い
から藁も生産できない。藁が無いと縄が作
れないし、ワラジも作れない。泥壁もでき
ないので家も造れない。このように当時の
暮らしの中で、時には米をしのぐほど重要
なものであつた藁すらも自力で生産できな
い場所だつた。この地に暮らす人々は生活
用品のほとんどを本州・四国・九州から運
び込まれる物に頼らなければならなかつた。
その運び込みを担つたのが北前船である。
古くから日本海を西回りで輸送した和船だ。
航路が蝦夷地まで延びたのは十八世紀末
春から秋にかけ、大阪・瀬戸内海・下関・
北陸・北海道間を一往復していた。

西国で米・塩・酒・雑貨などを仕入れて
函館・松前・江差まで行き、蝦夷からは昆布・
ニシン・鮑・ミカキニシンなどを大阪へ運び、
積荷を売りさばいては巨利を得ていた北前
船。北海道では北前船とは言わず、弁財船
(ベンザイセンあるいはベザイセン)と呼ん
でいた。

一本柱の帆船で、風がよければ北陸・北
海道間は十五〜二十日間の行程だつたが、
風が悪ければ二ヶ月もかかったという。い
ずれにせよ、風任せの西回り航路であつた。

ピークは北海道開拓期

江戸時代いわゆる和人の北海道生活圏は函館・松前・江差など道南の一部。その一部のエリアに幕末期には約六万人が住んでいた。その六万人に対する生活物資供給が北前船の仕事であった。しかしこの頃の北前船の利益は、六万人分の生活物資供給で得られる利益より、北海道から仕入れる海産物の利益のほうが圧倒的に大きかった。

そして時代は江戸から明治へと大きく変わる。明治二年に開拓使が置かれ、新政府が全国から開拓移民を募り始めると、六万人だった北海道の和人口が年々すごい勢いで増加していく。当然入植者に対する生活物資供給量が鰻登りになる。北前船主の一番稼いだのがこの北海道開拓期であった。「江戸時代の和人に対する生活物資供給の利益」+「北海道の海産物の利益」だけでもす



江差町郷土資料館提供

江戸時代、日本海はまさに北前船の花道、日本の表舞台だった

すごいレベルであったのに、「開拓期の和人に対する生活物資供給の利益」が更にドンと増加し、莫大な儲けになった。日本海はまさに北前船の花道、日本の表舞台だった。

明治二年からは、手宮（小樽）まで運航するようになる。この時代、北海道は、開拓が始まったばかりであり、函館・小樽などの主要港を除きほとんどの港が未整備だったため、水深が必要な大型蒸気船は着岸できなかった。しかし、北前船は岸近くまで停泊できたので、そこから荷物を伝馬船に積み替えて陸揚げ作業を行った。明治政府は大型和船の建造禁止令を出して蒸気船に切り替えようとしていたが、こういった事情の北海道では、明治末期になっても北前船が姿を消すことは無かった。蒸気船主体の太平洋を走る「東回りコース」がメインになるには、港の整備を待たなければならなかったのである。

「安全・迅速」VS「安全・責任」

普及が遅れていた蒸気船に対して優勢であった北前船だが、明治二十年頃になると勢力が拮抗してくる。そんな時期に小樽の海岸倉庫が建てられ始める。建てたのはほとんどが北前船の関係者だ。蒸気船に勢力を奪われようとしている時、北前船主は倉庫の建築に走った。年に一航海しかできない北前船。北前船主達は、この時期になると、もう自分達の行く末を見据えていた。ここが彼らの商才の優れているところだ。

蒸気船のキャッチコピーは「安全・迅速」であった。それに対抗して北前船主たちは



旧大家倉庫（小樽）

「安全・責任」を謳った。定期便で小樽に入ってくる蒸気船に対抗するための手段として、広い倉庫を建てて安全に保管し、そこで切り売りをする。こうして、小樽の海岸沿いに大型倉庫の建設ラッシュが始まり、北前船が持ち込んだ荷物は倉庫にすべてストックされた。また道内の内陸開拓が進んでいたため、内陸開拓者の求めに応じて切り売りも行った。これが問屋となる。北海道の問屋の元祖は小樽であり、今でも当時の中心地である南小樽地区には、その名残が残っている。

蝦夷から北海道へ。江戸時代の上りの利益から、明治開拓時代の莫大な下りの利益へと変わっていった北前船。小樽では倉庫業も発達した。北前船は最果ての地に暮らす人々にとって命の船であり、北前船主にとっては巨万の富を生み出す宝の船であった。

あつろの 杜 山本 純一さん

フォトグラファー

Interview

北海道の厳しい冬を
懸命に生き、新たな命をつ
なぐ動物たちを撮影するフォ
トグラファー山本純一さん。10月
には写真集『越冬』を出版。そ
んな山本さんのフォトワー
ルドを紹介します。

写真集『越冬』

一〇月に出版した『越冬』は、一三年前、冬の知床で生きる鹿の写真撮ったのがきっかけでした。そういう厳しい姿を見て、越冬していく生き物を撮ってみたいと思ったんです。

表紙の写真は僕の頭の中に白鳥のシルエットがイメージにあり、それを撮りたくて四年間十勝川に通い、ようやく撮ることができたものです。

ツガイのシマフクロウの写真も掲載していますが、これも一〇年以上前、僕が知床に行き始めた頃からイメージしていたもので、去年の一月にやっと撮ることができました。この撮影で写真集のパズルができあがった。ツガイのシマフクロウは知床の象徴だし、仲良く生きています。『越冬』にはどうしても必要なカットでした。夜なのでかなり暗かったのですが、山の高い所にスツと見えたので、「いた！逃げないでくれ」と、祈るよ

うな気持ちでドキドキしながら撮りました。

不思議なもので撮りたい写真に物にしようと思わずに足を運んでいると、神様が必ず出合わせてくれるんですよ。シマフクロウもそうだし、波から上がるシカもそうだし、表紙の写真もそうだった。諦めないで通っていると「撮らせて

撮りたい写真をとれるまで何年も…



山本純一
やまもとじゅんいち

帯広市生まれ。札幌在住。
'07年、23年間のサラリーマン生活にピリオドを打ち独立。Pure Peak Photoを設立。北海道の自然風景と動物をテーマに撮影を行っている。今年10月写真集『越冬』を出版。出版を記念し個展「越冬—命の鼓動—」も10月の銀座を皮切りに、全国各地で開催する。日本写真家協会・日本自然科学写真協会所属 楽しい写真教室主宰。道新文化センター・NHK文化センター講師。

くれているんだ」と感じることはありません。何か御褒美をくれますよ。

星とタンチョウと星野さん

星が好きで小学校五年の時から写真を撮りました。中学二年になって、親に一眼レフを買ってもらった。撮っていると自分でも写真を焼きたくなるじゃないですか。それで写真の引き伸ばしにはまって、高校生の頃は、写真小僧でも星しか興味がなかった。

プロになったのは六年前です。その前はカメラ関係の営業をやっていた、カメラを売るほうでし

た。僕は三七、八歳位まで、プロカメラマンになるのを諦めていたんです。休みの時に時々天体写真を撮っていた程度でした。家庭もあつたし。

そんな時、友達付き合いをしている写真が大好きな取引関係の人に「一度タンチョウヅルを撮りに行かないか。温泉に入れるし酒も飲める」と誘われ、一緒に行ったんです。タンチョウを見たのは生まれて初めて。冬だったので給餌場にタンチョウが舞いながら来るのを見て「すごい！」と思った。フィルムを二〇本位持って行ったんだけど、一日半で使い切ってしまった。それ以来タンチョウにはまってしまう。

いろんな人の写真を見て、行き着いたのが写真家の星野道夫さん。その星野さんに一七年前、ツルセンターで偶然お逢いしたんです。釧路湿原が最初のラムサール条約地になった時に基調講演が何かでいらつしやって、終わった後にお忍びでツルを撮りに来ていた。「星野さんですか」と声をかけてみたら「そうですよ」といろいろ優しく話をしていた感動しました。「アラスカに家があるから遊びにおいでよ」と言われたんですが、その次の年にカムチャツカでテレビの取材中、クマに襲われて

亡くなったんですよ。木村伊兵衛写真賞を取った星野さんの「ALASKA 極北・生命の地図」は僕のバイブルです。

これから

僕が一番苦手なのは実は花の写真。キレイに撮って当たり前のものを、それ以上に撮らないといけないのだから、キレイなものを撮るのは難しい。だから僕はなるべく女性と花は撮らないようにしているんです。

今は、北海道の原風景を撮っています。雑誌関係でいろいろ発表していますが、どこにでも原風景はあると思います。少し沢に入ったら林道の奥とか、みんながよく行っている身近な所にも人間の手がほとんど入っていない場所があるんですよ。

巨木も撮っています。開拓時代から切られずに残った巨木にはすごいエネルギーがあります。調べれば道内に巨木はいっぱいあるけれど、僕の目線で森をテーマにそんな巨木も撮っていききたい。

これからも、身近にある北海道ならではの自然の風景を、「この場所はこのように美しいんだ」「こんな荘厳な風景があるんだ」と僕なりに写真を通して表現し、伝えていきたいですね。

「より一層おいしくなった、変わらない味」をぜひお試しください。ある食べ物の広告にこういう謳い文句がありました。より一層おいしくなったということは、味が変わったということだと思つたのですが…。

当然ながら、広告の言葉は遠慮や謙譲の気持ちなどサラサラ無く、自分はこの上なく良いものだ主張します。

どの製品も生活に「潤い」と「彩り」と「豊かさ」と「快適さ」と「満足」を与えるのです。それがトイレットペーパーだったりするので、ビックリしてしまします。ティッシュを箱から取り外して使うのが「革命」だったり、新型便器が「新時代を創造」したりするのです。

あるカタログ・ギフト会社の広告を見ていたら、「いずれの品物も、贈られて喜ばれる逸品ぞういです。どのコースの品もお値打ち品ばかり。暮らしに潤いを与え、豊かに、快適にする、ご満足いただけるものと第一に考え、ラインナップいたしました」と謳いあげていました。一番安いコースは二五〇〇円。この値段で、暮らしに潤いを与え、豊かで快適な満足できる物が手に入るというのですからとても嬉しい話です。

広告の世界は「新」という言葉も大好きです。かつて「新ニュービーズ」という名の洗剤までありました。「新ES Now」という書名の、眼科医をターゲットにした雑誌もあります。ただ「新」であるだけではなく、「NOW」な「新」なのだから驚きます。そういうサントリーには「ニューオールド」というウイスキーもありですね。正反対の言葉なのに違和感を感じないから、慣れとは恐ろしいものです。

O W L I N F O R M A T I O N

札幌発の人気絵本シリーズ

最新作「おばけのマールとおかしなとけいだい」が発売
おばけのマールの「おばけマグカップ」ほか関連グッズも発売



おばけのマールの「おばけのシール」(280円)
「おばけのマールのコーヒー」(100g1袋735円、200g1袋1,365円)
おばけのマールの「おばけマグカップ」(2,100円)
※限定100個
「おばけのマールのホワイトブロンズ像」(50,000円)
※受注生産 ※価格は税込みです

かわいいおばけが札幌を冒険する絵本「おばけのマール」。第5作に描かれたのはおばけのマールエピソード1のできごとです。

ある日マールはおばけの仲間の存在を知り、仲間会いに昔の札幌へタイムスリップ?はじめてほかのおばけと過ごしたマールに、時計台の鐘の音が伝えたものとは…。

発刊にあわせグッズも発売。時計盤をデザインしたマグカップは子どもも使える小さめサイズで、温めると絵柄がマールの姿に。マールをイメージさせるちょっとまーいコーヒー豆でミルクたっぷりのカフェオレを入れれば、親子でカフェタイムが楽しめます。

札幌の彫刻家によるかわいいブロンズ像やマールとおばけたちのシールもあり、本から飛び出したマールの世界を楽しめます。

戦後北海道彫刻の潮流にふれる

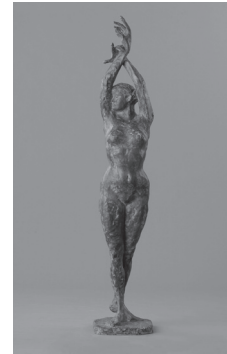
4つの星 札幌二中の彫刻家たち

9月22日(土)～11月11日(日)

休館日/月曜日 開館時間/10:00～17:00(入館は16:30まで)

本郷新記念札幌彫刻美術館(札幌市中央区宮の森4条12丁目 TEL 011-642-5709)

観覧料/一般300円、65歳以上250円、高大生200円、中学生以下無料



本郷新「蒼穹」1960年

本郷新(1905-1980)、山内壮夫(1907-1975)、佐藤忠良(1912-2011)、本田明二(1919-1989)。戦後日本の彫刻界に鮮やかな軌跡を残したこの4人は、いずれも今年創立100周年を迎えた旧札幌第二中学校(現北海道札幌西高等学校)で多感な時代を過ごしました。

本展では、4人が公私に交流を重ね、刺激しあいながら創りあげた個性的な作品に加え、お互いを描いた油彩や彫像などを展示。また当時の日本の若き彫刻家たちに大きな影響を与えたフランス近代彫刻からロダン、ブールデルらの作品を紹介しています。

館内では本郷新、山内壮夫、佐藤忠良の3人が共同制作したレリーフ「大地」制作の様子を映した貴重なドキュメンタリーを上映。同じ時代を駆けた彫刻家たちの交流と創造の軌跡をぜひご覧ください。

おすすめ本

馬のいた風景
ユベオツの風に吹かれて

斉藤俊彦・著

中西出版

定価1,470円

(税込)

四六判、304頁

2012年10月

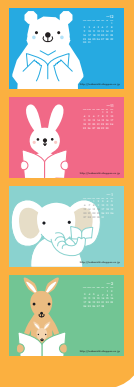
刊行



かつて江別に「馬のいた暮らし」があった。
今では街中であまり見かけることのない馬。しかし時空をほんの少し遡れば、生活のいたるところに馬の姿がありました。丹念な取材を元に描いた馬と人々の暮らしの記録。

中西出版Webサイトで
どうぶつ壁紙カレンダー
無料配布中!

中西出版Webサイトでは、読書を楽しむどうぶつ達の壁紙カレンダーを無料配布しています。本紙右下のQRコードまたはURLからホームページにアクセスし、ダウンロードすることができます。



苗穂駅近くにコミュニティカフェがオープン

苗穂カフェ

札幌市中央区北2条東11丁目23 TEL011-231-9055

営業時間/朝コーヒー…8:30～9:45

ランチタイム…(20食限定、予約可) 11:30～13:30

カフェタイム…14:00～17:00(土曜はカフェタイムのみ9:30～15:00)

定休日/日曜・祝日 駐車場/なし



7月14日にオープンした「苗穂カフェ」は、1階にカフェスペース、1階の一部と2階にイベントやサークル活動などに使えるレンタルスペースを備えた、苗穂駅周辺地区の新しい交流の場です。

開放感のある1階のカフェでは、ランチタイムに地域の女性たちの手による「おうちごはん」を20食限定で提供。カフェタイムにはコーヒーや紅茶などとあわせ、和・洋2種類のパフェやマドレーヌを味わうことができます。10月からは朝コーヒーもはじまりました。また、苗穂マドレーヌや日替わりパンの店頭販売も人気です。

「苗穂女子会」主催のフリーマーケットや、カフェライブが定期的に行われるなど、地域の発信と交流の拠点となっています。

今号の「あうるの杜」は10月に弊社から写真集「越冬」を出版したばかりの、山本純一氏に登場願いました。氏は「北海道の自然と動物」をテーマに撮影を続けるかわら、文化センター等で講師も務める、気鋭の写真家です。次に「おばけのマール」の話題をお届けします。お待たせしていました第5作が、11月に刊行の運びとなりました。今回はマグカップやコーヒー豆また地元彫刻家の手によるブロンズ像等関連グッズと同時発売となります。ご期待下さい。最後になりますが、弊社と関わりの深い文芸評論家の木原直彦氏が、「北海道功労賞」という栄えある賞を受賞されたことをご報告いたします。今後も「北海道の文学振興」のために、ご活躍される事を心より願う次第です。(Y)

■発行・編集/中西出版(株)

〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34

電話011-785-0737 FAX011-781-7516

E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp

■発行責任者/林下英二

■発行日/2012年10月31日

http://nakanishi-shuppan.co.jp

